

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。神戸大学文学部、大学院人文学研究科、を代表して、お祝いを申し上げます。本来、皆さんとガイダンスでお目にかかり、ご挨拶すべきところですが、新型コロナウイルス感染症の世界的流行の中で、兵庫県にも緊急事態宣言が出されそれもなくなりました。

新型コロナウイルスの蔓延は、そのこと自身が極めて深刻なものであるだけでなく、グローバル化する現代社会の中で、私たちが生きていくこと、「生存」そのものがいかに困難であるのかを見せつけるものでもあります。

これから皆さんが学ぶ、人文学の諸分野は、一見、このような事態への対処と遠いところにあるように見えます。しかしながら、私は、このような危機の時だからこそ、未来に向かって、人が人らしく生きることとはどういうことなのかを、具体的な研究の中から問う人文学の意味は大きいと思います。危機の中で、若い皆さんが、これまでの人文学の成果と方法を受け継ぎ、その感性を研ぎ澄ませて社会をより深く捉えていくことなしには、未来を切り開くことはできないと考えています。

私は、阪神・淡路大震災以来、大規模な自然災害時に、地域の歴史資料を保存し、歴史文化の未来への継承を進める活動をおこなってきました。災害に対応する中で学んだことが2つあります。第1は、多様な「知」が協働して社会に対応するということです。災害から社会を再生していく際、直後の緊急医療、避難所対応、さらに生活や経済の再建、そして文化の継承というように、様々な局面で多様な「知」が協働して対応することが求められます。このことは、私たちに必要とされている「知」が、深い専門性に裏付けられるとともに、広く市民社会に根付いていることが必要であることを意味しています。

大学での教育は、共通教育と専門教育の2つの柱から成り立っていますが、それは、このような現代社会が求める「知」を皆さんが自分のものとしていくために必要とされています。また現代的な「知」は座学に止まるものではありません。インターネット上の空間も含め、様々な場で、実践的に学ぶことも大切です。総合大学としての本学の多様な学びの場を活用していただければと考えます。

第2は、創意や発想は、若い人々から生まれ、多くの人々を励ますということです。私は、これまで、被災地の大学の学生や大学院生の皆さんが、地域の方々と様々な工夫を凝らしながら、地域の歴史遺産を保存活用する姿を見てきました。その中で、私には思いもよらないような新しい方法が提案され、そのいくつかは現在、災害時の歴史遺産保全の基本的な方法になっています。また人々の「生存」にかかわり、これまででない研究テーマをその中でみつけていった学生、大学院生に出会ってきました。私が長く災害に関わった背景には、このような学生のみなさんの励ましがあります。人文学において、その成果は、なにより卒業論文、修士論文、博士論文に現れます。みなさんが危機の時代の中で、誇りにできる論文を創りあげていただければと強く願っています。

私たちも、みなさんとともに、そのような場の形成のための努力を続けていきます。昨年10月から、神戸新聞で、月1回、大型寄稿「21世紀の人文学－危機の時代を共に生きるために」を連載しています（神戸新聞のホームページからも読めます）。また、一昨年発足した神戸大学出版会から『マンガ／漫画／MANGA－人文学の視点から』『地域歴史遺産と現代社会』等を刊行しています。読んでいただき、感想をお寄せください。

新型コロナウイルスのため、大学での教育研究環境は極めて厳しい状況にあります。またその対応も長期にわたると思います。私たちは、学生、大学院生ひとりひとりの学びを止めないために、様々なかたちでみなさんとともに努力を続けていきます。粘り強く、楽しく学んでいきましょう。以上を、簡単ながら私の式辞といたします。

令和2年4月

神戸大学文学部長、大学院人文学研究科長 奥村 弘